

過去の地震から知る、未来の備え ～善意の贈り物がもたらすもの

名古屋大学災害対策室 木村玲欧

未来の地震にそなえるためには、過去の地震を知ることが大切。1945年にこの地域で2,306人の死者を出した「三河地震」から、未来の備えにつながる教訓を考えていきます。

■戦時中でも、古着やもちなどの救援物資が送られてきた。しかし、もちはカビていて食べれず、服は倒れた自分の家からひっぱり出したので役に立たなかった。(明治村城ヶ入集落(安城市城ヶ入町)・岩瀬繁松さん)

地震のあとに救援物資が来た。どこから聞きつけたか、九州からもちが送られてきた。ところが、こっちに来たとき、かびとったんで、食べへんかったね。

あと衣類も来たけど、着るもんにはみんな困らへんかったもんね。焼けたんじゃないもんね。



絵 藤田哲也

「善意の贈り物」の「善意」は、あくまでも送り主の一方的な善意です。下手をすると「押しつけがましい」ことにもなりかねません。「それが被災者にとって本当に必要なものかどうか」を考える必要があります。地震災害において、古着や食物を送ることは迷惑であることがほとんどです。また何かを送るときに、多くの種類のを1つの段ボール箱に入れると、現地での仕分け作業に大きな負担をかけます。1つの段ボールの中に入れるものは1種類にすること、内容物(商品名)・数量・注意事項(消費期限等)を箱に明記することが鉄則です。

被災者へのインタビューを通して明らかになったことがあります。それは「一番ありがたかったのは現金だった」という被災者の生の声です。1995年に起きた阪神・淡路大震災では、1,763億円の義援金が集められました。しかし被災者がケタ違いに多いために、1軒あたりの金額は家屋修理費用程度にしかありませんでした。その一方で、古着や中古品、賞味期限の過ぎた食べ物、腐った食べ物などは、次々に焼却処分されていきました。兵庫県西宮市では、その費用になんと2,300万円かかりました。もちろんこの費用は税金でまかなわれました。

「地震発生翌々日以降は、大量の支援物資が連日運び込まれた。・・・スペースは限界・・・気持ちありがたいが、水は給水車が巡回しはじめたのもう不要。毛布も十分。乾パンなどは結局食べないし、古着は衛生上の問題で使えない」。これは、2004年10月30日の日経新聞の記事(支援物資ミスマッチ、水や食料あふれる)です。三河地震から60年あまりが経過した新潟県中越地震でも、未だに同じ状況が続いているのです。